

日 時：平成27年8月31日（月）15時～17時

場 所：京都ロイヤルホテル&スパ 翠峰12

出席者：委員名簿参照（委員10名中6名出席）

（白須）

- ・ 前は、第1回の論点のうち4つのテーマについて意見交換を行った。
- ・ 今回は残りの4テーマについて、それぞれ2人の委員から説明をいただき、その後意見交換したい。

1. ②海外市場の開拓

（辻委員）

- ・ 伝統産業と地域産業、ハイテク産業では海外市場への取り組み方が大きく違う。日本或いは京都の産業全体では輸出比率は高くない（ドイツ40%、日本20%）。海外市場を拡大できる可能性がある。
- ・ 海外市場で成功するための条件は、規模が小さいうちから海外に目を向け、人材育成に積極的に取り組むこと、海外企業の同業をベンチマークとすること、これらを経営トップが先頭に立って行うことが重要。
- ・ 京都は最高のロケーション、つまり本社は京都が最適だと思っている。ただし、土地が高い、人件費が高い、そしてプライドが高い。この「3高」を乗り越えられたら京都は最高だと思う。

（各務委員）

- ・ この4年間、京都の伝統工芸品を中心に海外に輸出する挑戦を続けてきた。上海、ニューヨークに店舗を設け、展開してきた。現在世界の超富裕層や王族を中心に多くの引き合いをもらい、ある程度の手ごたえを感じているところだが、難しさがある。
- ・ 海外でビジネスをする際の当たり前のことを、みなさん知識として理解できていない面がある。
- ・ 伝統工芸品は海外では3倍くらいの値段になるので、購入できる方は非常に限られてくる。世界中の富裕層のコミュニティにしっかりと入れるかどうか、その商品を効果的に流通させられるかのポイントとなる。
- ・ そのための有効な手段として、そのコミュニティの方を京都に連れて来ることが重要。京都の工芸品は、伝統文化と一体として育まれてきたので、その背景・舞台のなかでこそその価値が本当に伝わる。
- ・ 京都は伝統産業を海外に発信するためのルールメーカーになるべき。例えば、国際工芸展覧会のようなことをして、京都の工芸品・伝統産業を見てもらう舞台装置を準備しても良い。

（自由意見交換）

- ・ 伝統工芸品と先端ハイテク分野とは相当違う。ハイテク分野は外に出て行かないとビジネスにならないが、伝統工芸などの分野では京都に呼び込む。（辻委員）
- ・ 京都の産業構造を見ていると、京都が得意とする部品・部材は伝統産業がベースとなって創出されたものが多い。特に、大量生産で消費者に行き渡る電気・電子製品の要となる部品・部材は京都が出してきた。伝統産業分野も伝統があるから優れているという考えは捨てないといけない。蓄積された伝統の技術を何に応用して使うか、ということを常に考えていなければならないと思う。（西本委員）
- ・ 世界中の方に来ていただいて、伝統工芸・伝統産業の中心にあるものを、世界の中になくってはならないものとして翻訳していく戦略が有効ではないか。（各務委員）
- ・ シリコンバレーには中国から多くの企業が来る。多少品質が低くても接触してくる中国企業に市場を取られてしまうので、日本の企業ももっと発信していかないと損なう。シリコンバレーの真ん中に京都のモノづくりの「何でも話を聞きます」という拠点を置くといったことは行政にしていなければ良い。（今庄委員）
- ・ 伝統工業など手で作るものは、どう頑張っても数多く作れない。中小企業が受けられる数量を意識しておかないといけない。（西本委員）
- ・ アップル、グーグルとの取引では、小ロットが期待されている。彼らはそういう会社を探している。

うまく取り入りたい。(辻委員)

- ・ベンチャーや中小企業の起業の時点で経営トップが外に目を向けるということが大切。支援機関などたくさん使えるものがあるにも関わらず十分にまだ活用できていないということだと思う。(辻委員)

2. ⑤世界規模の交流環境整備，グローバル人材育成

(原委員)

- ・クリエイティブクラスとアライアンスについて，2点問題提起をさせていただく。
- ・創造的な能力を発揮する人材がこれからの価値の源泉である。どのような立地条件がクリエイティブな人材を惹きつけるかという2つあり，多様性とトレランス（寛容）である。京都としてどういう人材を集めるか，人材を集めるためのしくみをどうすれば良いかということが，ここでのグローバル人材育成のヒントになる。
- ・文化・歴史・ストーリーと言ったところを1つの基軸にしてもっとアピールすれば，日本型京都型の尖った人材が集まってくるのではないと思う。
- ・手本として本山型のモデルで，京都の理念・文化・価値観をうまく広げて地元に戻ってもアピールしていただける。そういうのがインバウンドにもアウトバウンドにも役立ってくるかと思う。
- ・アライアンスについては，一種の京都型のアライアンスというような，むしろ信頼に基づくネットワークは京都には一日の長があると思う。流動性が低い中で的一种のお付き合いがあるかと思う。京都の産業界あるいは地域のマネジメントをされている方は当たり前と思っているが，実はそうではなく，それこそを価値として表出し，アピールして，体験，経験を共有する世界規模の交流環境の整備につなげていくのが良いかと思う。

(佐々木委員)

- ・シリコンバレーとかアメリカ型のクリエイティブシティはICTがベースになっていて，比較的歴史も浅く，ニューカマーが中心になっている。京都の場合は文化資本の厚みの幅が全く違う。そういうところでどのように新しいことをするか，あるいは伝統のしがらみを解きほぐしていくのが重要になる。信頼に基づくネットワーク，アライアンスもともすればそれは縦型社会に分断されてきた。そこに対して何か衝撃を与えるといったしかけが必要になってくると思う。
- ・圧倒的にアニメとか漫画は東京に集中しているが，京都にはマンガミュージアムがあって大学も多くそれなりに個性的な文化素地がある。そういうコンテンツで，長い伝統で固まってきている土壌を揺さぶるようにするという試みができないかなと常々思っている。
- ・京都のクリエイティブ産業という点でみると，歴史的に日本に一番厚みのある文化的資本を再編集・再創造していくということが世界的に見ると非常に意味があるので，民間のお金も回ってくるようにするという一大プロジェクトがあったら良いと思う。

(各務委員)

- ・「GENIUS TABLE」は海外の方とのネットワークを作り，京都の最大の資産の1つである学生の力を知に活用してもらおうアイデアから，京都大学と京都市の協力で先日試験的に始まったプロジェクト。今後世界初のソーシャル観光サービスのような形で成長を遂げられると良いと思っている。

(自由意見交換)

- ・国内も海外も含めていろいろな経験を積まれた方々と，若手の人材が直接会うことはなかなか難しい。集まって交流・接触ができる共通の場を複数作ることが必要なのではないかな。(辻委員)
- ・集まり，交流・接触できる場は，新産業を生み出すきっかけになるのではないかな。(白須)
- ・京都の観光客の80%は5回以上来るリピーターで，そういう方々に対してありきたりなところは訴求力がない。隠れた京都の良さを活かすようなイベントは少人数が対象だがいろいろなところで企画されていると思う。「まいまい京都」の事例は示唆に富んだ事例かと思う。(原委員)
- ・リピーターの外国人観光客向けに，伝統工芸の工房を巡るようなプログラムを作ろうということで具体化を進めている。本モノの伝統工芸を見ることができ，おそらく直接購買もできる仕組みを，若い人たちの力も組み合わせてきっちりした形に仕上げれば良いと思う。例えば，アーティストの卵と京

都のモノづくり技術の高さを組み合わせれば、きっと成功すると思う。(西本委員)

- ・外国のアーティストと伝統工芸の従事者との組み合わせで、新しいものを提供して、買う意欲をつくり出すことが必要。フランスのアーティストの卵が3ヶ月京都に滞在し、西陣の空き工房で製作をした事例もある。組み合わせは、ジャンルを超えたほうがよい。(佐々木委員)
- ・難しいと思うが、文化産業に関するKPIの設定が重要になってくると思う。クオリティやイノベティビティ、クリエイティビティを行政がリードすることで向上させていく必要があると思う。(各務委員)
- ・フェスティバル、すなわち祭りと、アート・マーケットいわゆるフェア、この相互連関を理解することが重要。つまり、フェスティバルが継続的に回ることと、そこで生み出された作品をマーケットで経済価値に変えていくという、結びつきが大切。「琳派400年祭」「パラソフィア」も1回きりでは意味がない。これが継続的に開催していくとなったときに初めてフェスティバルとフェア、すなわちアート&クラフトマーケットの関係が作れるかと思う。(佐々木委員)
- ・ミラノでは、伝統からモダンまで多様な家具・工芸品が出展され、世界中から多数のバイヤーが集まり、新しいトレンドをキャッチして自国へ持ち帰る。京都は潜在的にそういう国際的なイベントを打てる空間である。(西本委員)
- ・背景に資金の問題があると思うが、単発のイベントではなく継続性していくことが大事。本当の意味でのプロデューサーがいらない。(辻委員)

3. ⑦事業や技術の継承

(岡田委員(事務局が代読))

- ・事業や技術の継承については、伝統産業で課題になっているという話があったが、一般の商工・サービス業事業所においても広がっている問題である。
- ・京都の和装産業等の実態を見ると、かなり深刻な状況があるので、人的、技術・技能的、あるいは経営的な承継を図る対策を早く講じていく必要があると認識している。
- ・伝統産業の高度に分化した分業制度の硬直性を打ち破って、工程連携や工程補完を模索する動きがある。このような業種、部門ごとの連携・補完によって、地域産業の持続性を確保する取組を、行政としても支援していくことが必要。

(西本委員)

- ・本当に好きで技量を究めたいという人以外、普通の人はアルバイトの時間給で働いている方が良いという状況がある。こういう状況を克服するために、まずビジネス規模を大きく方策を講じないと、後継人材を育成できない。
- ・京都市の産業技術研究所では伝統工芸分野の後継者育成のプログラムを毎年実施している。このプログラムでは、始めから終わりまですべての工程に関係した技術を教えており、そのコースを終えたとすべての工程を理解できるように工夫されている。技術を継承するトレーニングシステムは既にできている。
- ・事業の継承が厳しい業種は結構ある。関わっている就業者数と年間の売上などを数値分析し、どのように改善すべきか、リアリティのある施策を講じる必要がある。

(自由意見交換)

- ・産業として成り立たなければ伝統産業を続けていくことは難しい。市場規模が縮小しているのに、これまでと同じ規模の従業者数を抱えたままではやっていけない。(今庄委員)
- ・経営規模を倍くらいにすれば、後継人材は出てくる。(西本委員)
- ・伝統工芸や従来からの産業でシェアを拡大するというのは絶対不可能なのか。例えば工芸品の修理は今非常に重要。世界まで広げるとさらに需要があるかもしれない。(辻委員)
- ・京都造形芸術大学では修復を教えている。そういう人材育成とともに、市場拡大をしていく余地があるのではないかと思う。(西本委員)
- ・京都の場合は、フィレンツェと条件は同じでミュージアム(産業)クラスターとなり得る。文化財等の修復ができる都市は世界で限られている。文化財修理の内需が発生して、その修理レベルが上げられ

ばアジアなり、さらに広くそういう領域の需要を押さえることができる。(佐々木委員)

- ・京都市産業技術研究所で伝統産業の個々の技術を開発することも大事だと思うが、伝統産業の全体のサプライチェーンの構造を変える、適切なサイズに再設計するというのも大事。作るための研究だけでなく使うための研究もしていけば、需要を喚起できて良い。(原委員)
- ・大量生産される消費財については、古いモノを廃棄して新しいモノを買うという循環を生みださない限り、産業として成り立たないのが宿命である。私が所属している機関は、「産業技術」研究所なので、そういう社会学的なシステム技術もこれから研究対象になるかもしれない。真剣に考えるので、京都市としてファンディングをお願いしたい。(西本委員)

4. ⑧地域と企業活動（法人市民としての役割）

（岡田委員（事務局が代読））

- ・一般的に従業者規模が小さいほど同一市町村内での取引のウェイトが高いという傾向が見られる。小規模企業ほど、住民生活との密着度が高い、地域内の経済循環の担い手としての役割を果たしている。
- ・小規模企業については今後社会的な役割を評価して、地域社会の維持を目標に掲げることが、高齢化が進展している京都では大事なのではないか。
- ・市内への進出企業ということで、京都には京都市域外からいろいろな企業が入ってくるが、そういう企業に対しては雇用や調達といった面で、地域貢献を求めることも大事ではないか。

（西本委員）

- ・京都市内は土地が高く、高層建築が規制されているので、企業立地のコストが高くなる。市の施策として、どうしていくかは大きな課題。京都市内には研究所を作り、頭脳的な機能を集中させるよりほかはないのではないか、との指摘もある。

（自由意見交換）

- ・岡田先生も京都の中小企業というのが地域の担い手であると指摘され、国も小規模企業振興基本法で零細なところの大切さをうたっている。全国的にも多くの自治体が中小企業基本条例などを作っているが、そのあたりも含め、中小企業の役割を見直すことについてもご意見があればお願いしたい。(白須)
- ・京都の制約がある空間の利用にふさわしい試作工程や研究開発的な機能は京都に残すべき。京都型の新しいビジネスの展開をやや普遍化した「新京都モデル」に対する支援が積極的に議論されても良いように思う。(佐々木委員)
- ・伝統産業が持っている課題として、組合の集まりしかなく孤独感を感じることがある。事業者は土地が有する文脈を使いきれていない。地域が別のところでつながれるしくみづくりを京都のなかでエリアごとに展開していくと、京都の企業がその地域にどう貢献するかということと相まって組合だけではないコミュニティが形成されるのではないか。(各務委員)
- ・京都は常に他の地域から来られた人が十分活躍できる場を提供している。そこを伝統産業、ハイテク産業に関わらず、京都は受け入れるいろいろなしくみがまだ十分とは言えないと思う。(辻委員)

以 上